わさび田を守りつづける八面大王

その頃、聖武天皇（西暦七八五～八〇五年）の頃、石鬼八面大王という世にもすぐれた怪力無双の首領が、この地「安曇野」を治めていました。全国統一をめざす中央政権は、東北に侵略をすすめるにあたって、信濃の国を足がかりとし、況山の貢物や無理難題を押しつけ住民を苦しめました。大王は坂上田村麻呂の率いる優れた武器を持つ軍勢に刃向かうつもりはなかったものの、戦いは大刀や矢を持つ男ばかりか、女、子供まで巻き込み次々と村々は焼き払われていきます。追い詰められた大王は、わずかばかりの部下をともない有明山のふもとの岩屋にこもって力の限り戦いましたが、ついに山鳥の三十三羽の尾羽で作った矢にあたり倒れてしまいました。

八面大王は余りにも強かったため再び生きかえらぬようにと遺体はバラバラにされ埋められました。当農場の一角には胴体が埋められたと言われており、現在は大王神社として祀られています。

「大王農場」の名前も、この故事にちなんでつけられたものです。そこで大王が住んでいたと言われる有明山の麓、宮城の岩屋をそこに再現し、空高く積みあげられた岩山を「大王さまの見張り台」と名付けました。

頂上からは、わさび田と北アルプスが一望できます。

大王わさび農場

山はみどり　野に花　人にはこころ